

## あの日の頃 - 19

磯辺 茂

目黒星美学園小学校に勤務させていただき九年目になります。目黒星美の教育で素晴らしいと思ったことの一つに、合宿活動があります。皆さんも三年から六年までの合宿で、楽しい思い出をたくさんお持ちのことでしょう。

三年の初めての合宿では、出発の時、涙ぐみ見送っているお母さんを見かけます。合宿中お家では、さぞかし心配されていることでしょうが、子ども達はといえば、スポーツ大会、ウォークラリー、花火大会などの行事に熱中し、さよならをしないでよい友達との楽しい時間に興奮し、お母さんのことはすっかり忘れています。四年での海浜学校になると、海辺の近くで波の音を聞くうちに寂しくなり、海に向かって「おかあさん」とまでいかずとも、毎年数名布団を涙で濡らす子がいます。四・五年の合宿は、理科と社会のフィールドワークが主になります。タイドプールの中にうまく隠れている生き物を見つけたりアメフラシを触ったりと、その度に歓声が上がります。尾瀬では、片品村に暮らす人達の生活に触れ、その苦労や工夫を学び取ります。五月の片品村は、年によっては雪が残っており、銀世界の中を尾瀬ヶ原までハイキングし、冬から春へと移るときの厳しくも美しい尾瀬の自然を体験したこともありました。

尾瀬合宿のように、三十年間も同じ場所でその人達から直接に話を聞くことができる校外学習は、他校ではなかなかできないと思います。先ずそのように長期間しかも毎年、多くの方の協力を得ることが難しいでしょう。目黒星美は、片品村の片品温泉ホテルを、創業当時から、二十年も使っていて、ホテルの方々と身内のような親しい関係ができています。そのような関係から、地域の人達とも連携がとれ充実した合宿が可能になっています。目黒星美が、そのような繋がりをずっと大切にしてきたことが分かります。小湊、尾瀬、志賀、どこの宿舎の方々も、目黒星美の合宿を良く理解していて下さり、お願いしない事も活動の先を見通して心遣いして下さいます。志賀高原の木戸池温泉ホテルの小松支配人もその一人です。登山の時は先頭を歩き、志賀の自然を解説したり、自然の生き物の共生する姿から他と協力することを認め合うことの大切さを熱っぽく話してくれます。子ども達の水筒の鎖が切れているのを見ると、ペンチを持ち出し一つ一つ丁寧に直して下さいたり、自分達があずかった子ども達として、大切に接して下さいます。目黒星美の合宿は、このように多くの人達に支えられて行われています。子ども達は、そのような人達の暖かい思いやりに感謝し、その合宿が続いているのは先輩達の良い行動からと、その伝統に誇りを持ち自分達もそれに習おうと少し緊張して望んでいると思います。

五・六年生の合宿で特に感じるのですが、子ども達の目の輝きが良くなり、素直で明るくなります。日頃反抗的だったり、指導に手が掛かっていた子ほど見事に変化します。「先生、今まで逆ら

ってばかりいた自分の我がままさが分かりました。」なんて言われると、教師をやっている良かったと思います。ですが、だいたいは東京に戻ると元の子供達に形状記憶合金のごとく戻ります。教育はそんなに甘くないと感じます。ですが、もう少し冷静に見ると、合宿中の姿も東京での姿もどちらもその子の真実の姿であり、そのおかれた状態で自分を表現していると思います。合宿の中で見られた、自分を客観的に見直して自分を変えようとした力は、東京に戻っても子供連の中にあると思います。

高学年の合宿で、何が子供達を変えるのでしょうか。その変化が良く現われる合宿は、五年生男子の北軽井沢サマースクールです。五泊六日の、引率も含め男子だけの勉強合宿です。大森校長が、子供への事前指導で毎年言うのは、「北軽は、ないものがたくさんある。冷蔵庫がない。テレビがない。漫画がない。おやつがない。お母さんがいない。保健の先生がいない。だから、健康管理も自分でしないといけない。寒ければ長袖シャツを着ればいいし、着替えるのも自分の判断で行う。おやつがないので、食事を食べることも、何をどのくらい食べればいいのか、自分で決めればよい。」(お母さんがいない。)こと以外は困ったなという顔をしています。現地に着くと、宿舎(目黒区北軽井沢林間学園)は、真正面に浅間山がそびえるきれいな大自然の中にあり、建物もなかなか立派で心配が期待に変わります。そこで、学習とスポーツというごく単純な日課で過ごします。学習の、最初は、大森校長か新井教頭の作文指導で、自分の五感で自分だけが感じた事を感じたままに素直に表現する体験をさせます。今年の子の作文を紹介します。「”かれ葉のかおり”かれ葉は、くさったようなかおりでみんな同じだと思っていたけれど全然違った。しめった日かげでのいいかおりはかれ葉のかおりだった。一枚一枚かいてみると、鼻につんとくるかおり、やさしいかおり、お茶のようないいかおりのものというふうに一枚一枚ちがっていて、しめったところでは、それが混ざってもっといいかおりになっていた。それはまるで人のようだった。自分の個性をみんな持っていて、おもしろい人、やさしい人、みんな混ざっていいクラスになっていくように感じた。」

造り物でも画像でもない本物に触れ、感じたことのない世界を感じられたことに、自分と友達と同じ所にいても違うことを感じて良いこと、そして大切なのは自分が思ったことに自信を持つということに気づき感動します。そのような体験から、本当の自分を表現できるようになり、友達の考えにも耳を傾けそれを素直に受け入れることができるようになります。自分への自信は、謙虚さや意欲や忍耐力になります。その自分らしさを見つけさせてくれるのが、周りの自然であり余分なものがないシンプルな生活であり、友と協力しながら自分で判断して暮らす人間的な生活です。そのような環境の中で、校長の作文指導のような自分を発見させる働きかけをしてあげると、子供達が変わります。ただ自然の中に置けばいいのではなく、自分でできた見つけられたという体験をさせていくことが大事です。そのような体験の中で子供達は、毎日が新鮮で生きていることを実感します。教師は、そんな子供の変化がたまたま嬉しいのですが、子供のように素直に自分を変

えられず出る言葉は「今日は何日目だっけ。」だけです。五泊六日は長いものです。

東京に帰っても、生き生きとした自分を持ち他を受け入れる子にするには、自分で考え自分でできた喜びを持たせることです。それには、過保護や指示ばかりではだめ、ほったらかしもだめ、物があふれすぎ何が大切かどれが本物か分からない生活もだめでしょう。形状記憶合金のようにしてしまうのは、周りの大人の創り出す環境でしょう。ドン・ボスコの教育である子ども達の力を信じ、常に子どもと共にいて、子ども達の心に響く慈愛の心と手をさしのべたいと思います。合宿での生き生きした子ども達を、いつも教室でも見つけられるようがんばります。

【同窓会報、第 19 号 - 平成 12 年 7 月 1 日発行 - から転載】